

共通教育についての雑感

学 長
福田 優

共通教育とは異なる専門分野の学生が「共通して」選択できる「教養科目」であると理解しているのですが、正しいのでしょうか。私の学生時代（昭和38年頃）の教養科目といえば、医学部の特徴かも知れませんが、独語と英語がほとんど毎日あり、生物、物理、化学の講義実習の他、ラテン語、フランス語、倫理、人類、社会学等、多くの科目が課せられていました。量も多いが難解な学問が多く、教養とは随分と疲れて面倒なものだとの印象を受けた事を覚えています。従って、私が何となく想い描いていた自由で幅広く楽しめる筈の教養のイメージとは掛け離れておりました。しかし、医者となって人の生命を預かるのには、この程度の「教養」は持つのが当然なのだろうと考えることにしました。このように考えますと、教養科目とは、ある時は、専門の入門教育の如き意味を持ち、またある時は、専門外の浅く広い知識の修得を意味するように思えます。その意味では、医学部の教養教育は、特に最近では、6年一貫教育の目的の下に医学部に特化した専門性の高い授業となっています。限られた教育時間の中にあっては、将来の専門性を意識した教養教育も必要であるとは思いますが、本来の教養教育の目的は、広く国内外の他文化及びその歴史に触れて、自由な発想を可能にするためのものであると考えたいと思います。しかし、大学1、2年生では未だ社会経験にも乏しく、広い教養を身に付けることは、とても望めそうにありませんから、教養教育の目的は、将来に向けて、真の教養を身に付けるための動機付け、方向付けにあるのではないのでしょうか。

このように教養教育の重要性には、論をまたないことは事実ですが、毎年削減される人件費で十分な教養教育を続ける事が可能でしょうか。否、専門教育ですら存続の危機にさらされていると言っても過言ではないでしょう。特に最近の報道等によれば、運営費交付金の更なる削減の方針が平然と語られている現状を見ますと、日本の高等教育の将来には、暗澹たるものを感じずにはい

れません。専門教育は、それぞれの専門分野で活躍するプロフェッショナルを養成するもので、例えば、福井県で見ますと、現教員数7,751人の40%、3,094人が福井大学教育地域科学部卒、現医師数1,752人の30%、542人が福井大学医学部卒、そして、県内のエンジニア、科学研究者15,766人の27%、4,239人が福井大学工学部卒であることは、福井大学の専門教育なくして福井県は成り立たないことを意味しています。その他、県庁、市役所の他、多くの民間企業にも福井大学の卒業生の活躍があり、その「知的活動」が県を支えていることは誰も疑う余地がありません。このように広く培われた教養が地域そして日本を支えている事実が忘れ去られるとしたら、この上ない悲劇と言わざるを得ません。余りにも急変する価値観、節操の無さは、日本人の悪い癖なのでしょう。私達はこれからもより高い教養教育と専門教育を目指して大学を守り続ける義務があると考えます。